

DuMA ニュースレター

2025年5月26日

日本海中部地震から42年

日本海中部地震はまさに42年前の1983年(昭和58年)5月26日に発生しました。地震の規模はM7.7というもので、日本海側で発生した地震としては当時最大級のものでした。秋田県・青森県・山形県の日本海側で10mを超える津波が発生し、多くの人的被害が発生しました。

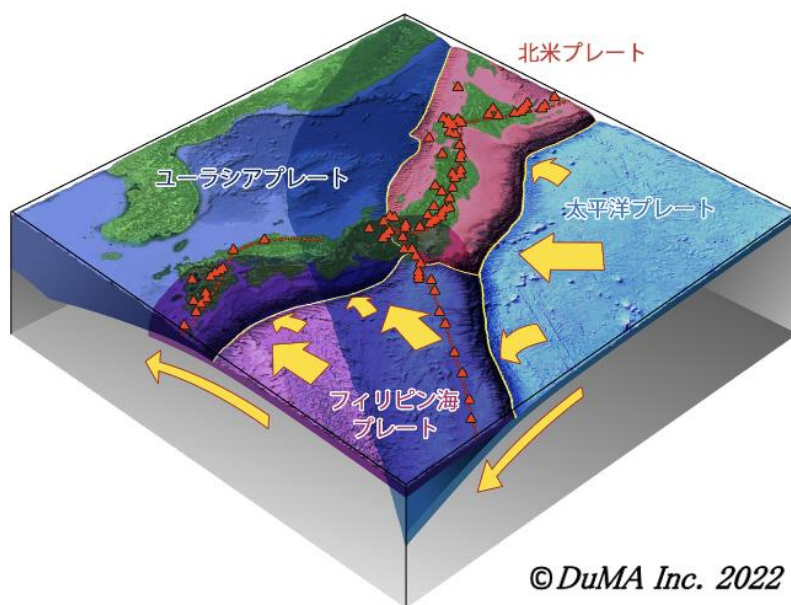
特に遠足で秋田県男鹿市の加茂青砂海岸を訪れていた13人の小学生が津波の犠牲となったのです。当時、旧合川南小学校(現北秋田市)の4年生と5年生が、2台のバスで遠足中でした。地震発生後、津波は数分以内に海岸に到達し、多くの児童を巻き込みました。

当時は日本海側では地震で津波が発生するという認識は普及していなかったのです。この地震では、日本国内での死者は104人に及び、そのうち100人が津波によるものでした。

当時のシステムで津波警報が発表されたのは地震発生から14分後であったことと、日本海側に津波は来ないという俗説が信じられていた事が人的被害を大きくしたのです。

今では、日本海東部でも太平洋側と同じように大きな地震が発生する事が知られるようになりましたが、当時は「津波を伴う地震は太平洋側でしか発生しない」と考えられていたのです。

日本海東淵にはユーラシアプレートと北米プレートの境界が通っているのが一般の方に認識されたきっかけがこの地震であったとも言えるかと思います。



© DuMA Inc. 2022

この地震の後、1993年には北海道南西沖地震(M7.8)も発生し、奥尻島が大きな津波被害を受けました。

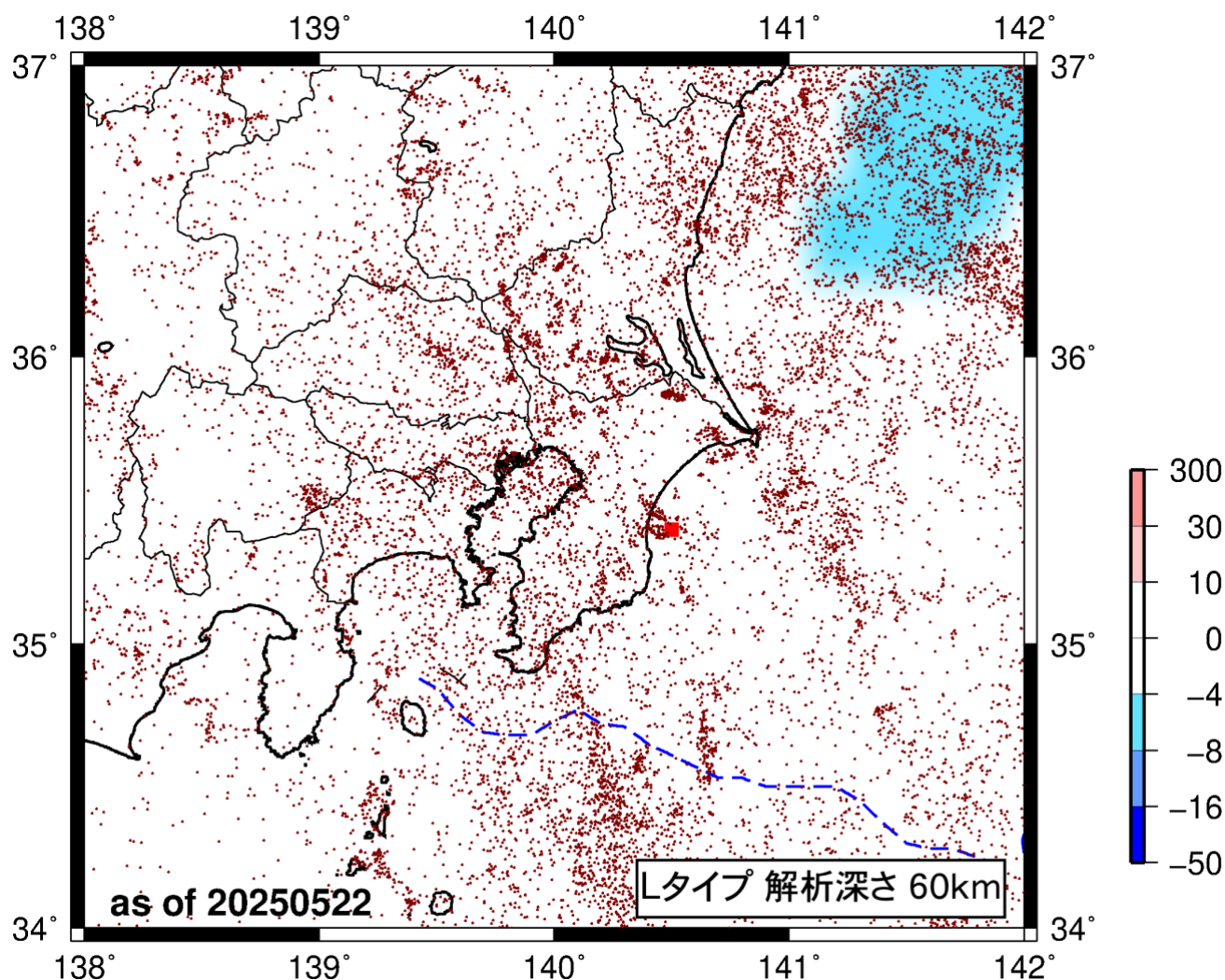
ちなみにこの日本海中部地震では当時普及しだしたビデオカメラで津波が川を舂上する映像も残されました。

https://www.youtube.com/results?search_query=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%B5%B7%E4%B8%AD%E9%83%A8%E5%9C%B0%E9%9C%87%E3%80%80%E6%B4%A5%E6%B3%A2

首都圏と九州の地下天気図®

今週号では5月22日時点の首都圏および九州のLタイプ地下天気図をお届けします。

首都圏については、前回4月21日のニュースレターとほとんど変化の無い事がわかりました。今のところ地下天気図解析では、首都圏に喫緊の問題点は無いと考えています。



上の地下天気図は解析の基準となる深さを地表(=0km)ではなく、**60km**としています。これは首都圏では、沈み込む太平洋プレートが内陸でやや深い地震(深さ50-100km)で数多く発生しているためです。特に東京でよく有感地震となる千葉県北西部や茨城県南部の地震はその発生する深さが50-80km付近に集中しており、このような地震活動をより正確に評価するために、解析の基準となる深度を60kmとしています。

九州地方については、4月14日のニュースレターが前回の解析になります。九州北部での地震活動静穏化異常は継続しています。宮崎県沖の日向灘の地震活動活発化の異常は、昨年8月8日の南海トラフ臨時情報発表の元となったマグニチュード7.1の地震前から豊後水道を含めて活発化しており、現在も活発化した状態が続いています。

